

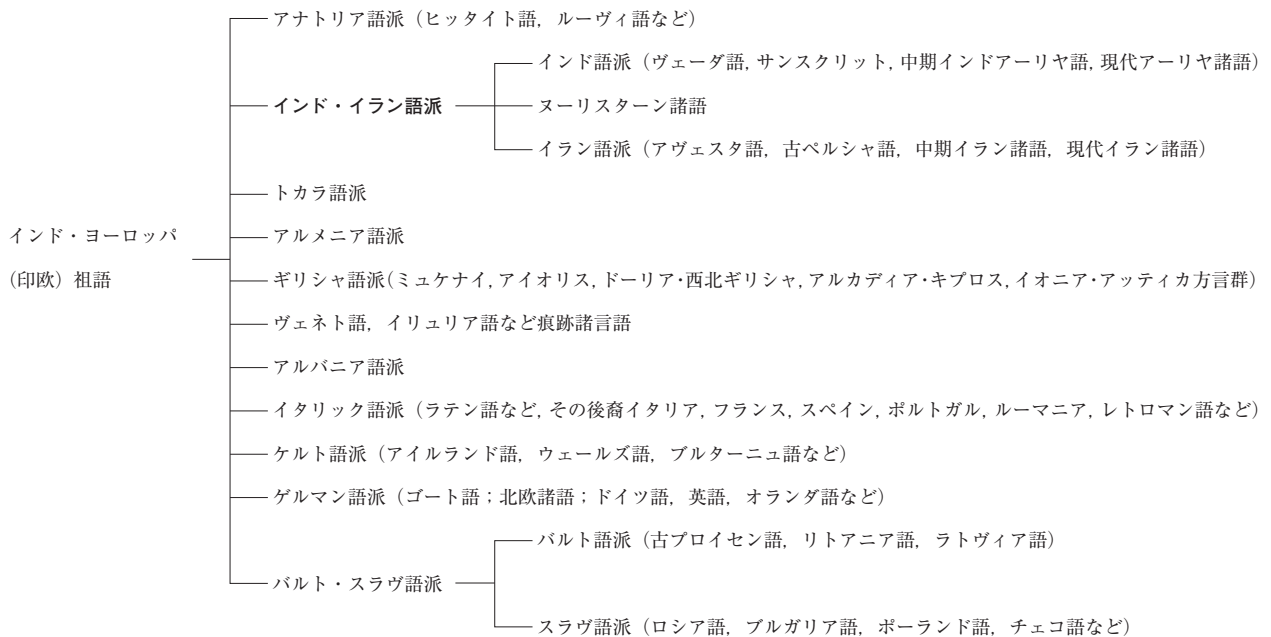
インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える

後藤 敏文

インド・アーリヤの諸部族は、紀元前2千年紀中頃、ヒンドークシュ山脈を越えてインダス上流域に進出し、讃歌集『リグヴェーダ』と、それに続く祭式文献群を遺した。その中から、彼らの世界観、価値観の一端を紹介し、それらが、仏教をはじめインド文明の展開中に果たした役割をたどる。また、背景にあるインド・ヨーロッパ語族共通の世界理解の中には、今日の「グローバル化」にまで連なる要素が確認できはしないか、問題を提起する。

1. インド・ヨーロッパ語族

インド・ヨーロッパ語族



1.1. 古代インドの文献は紀元前1200年頃編集固定されたと考えられる『リグヴェーダ』に始まる。以降、紀元前に遡る資料はインド・アーリヤ語で著され伝えられた文献にほぼ限られる。インド・アーリヤ語はイラン諸語やヨーロッパの主な言語とともに「インド・ヨーロッパ語族 (印欧語族)」に属し、一つの「インド・ヨーロッパ祖語」から分岐発展したものである。今日では、基になった印欧祖語を活用形の一つ一つから、そのアクセント位置に至るまで復元することが可能になっている。個別言語間の音の規則的対応 (「音韻対応」) に基づき、個別言語の中で起こった音の変化 (「音韻変化」) を辿って歴史的展開を検証する作業を中心とする印欧語比較言語学の成果である。上に掲げたインド・ヨーロッパ語系統図は各言語が単純に祖語から分岐した姿を表している。実際に印欧祖語を復元する作業には、このような単純な拡散を想定することから始めることが能率的である。インド・ヨーロッパ諸言語を類型論的に観察したり、たとえば、統計的分析によると、いくつかの言語間に共通する要素が見いだされ、より複雑な分岐過程を仮定したくなる。イタリック語派とケルト語派の諸言語の間には共通する構成要素が複数見いだされ、イタロ・ケルト語派が想定される可能性は確かにある。しかし、「イタロ・ケルト祖語」を具体的に復元

することは難しい。さらに、それらの構成要素の一つ一つは殆ど全てインド・イラン語派にも見いだされる。

このような事情は学問分野を成り立たせている条件とも関連する。インド・ヨーロッパ語比較言語学は、各言語の文献に在証される言語事実に基づき（「文献学的」）、言語間の事実を「比較」し「歴史的」に説明する、という三本柱から成り立つ。インド・ヨーロッパ語族の諸言語は「比較」を有効な方法とする好条件を満たしていた。例によって示すと、ギリシャの言語とインドの言語とが共通の言語から分かれて歴史に登場するまで、両言語群の間には接触がなかったと考えて良い。従って、両者の資料を純粋に対比させて比較することが可能なのである。その間に互いに干渉・影響があったとすれば事態は複雑になり、純粋な比較を行うことは容易ではない。一つの方程式中に、資料の比較分析と影響関係を解きほぐす分析検証という二つの未知数を相手にすることになるからである。イタリック語派とケルト語派との間にはそのようなもう一つの未知数が入り込んでいる可能性がありはしないか。以上、私が一見素朴な単純なパターンから出発することの説明である。

1.2. インド・ヨーロッパ語族とその拡大の歴史、彼らの理念、世界理解を巡る問題の把握は、人類史理解にとって重要である。英語などのゲルマン語派の諸言語をはじめ、ラテン語の末裔たち、スラヴ系諸言語が今日占めている地域を見れば諒解できるように、その言語圏は広範囲に亘っている。しかし、もともとは黒海の西北方に紀元前5千年紀（B.C. 4000年代）から考古学的に確認される、乗馬を伴う父権的遊牧文化（M. ギムブタスの「クルガン」文化）から出発していると見てよい。印欧語族の拡大は「世界史」へ向かって進んできた人類史に潜む重要な問題と関わっている。紀元前2千年紀には各地に文献資料が現れ、諸部族の侵出が跡づけられる：

- ・おそらく製鉄技術を持つ当地の山岳民を支配下に入れてアナトリアから版図を広げたヒッタイト王国（紀元前17-13世紀を中心）、
 - ・ギリシャ諸部族のエーゲ海への進出（ミュケーナイ文書は紀元前14世紀に遡る）、
 - ・ユーラシアの広範な地域におけるイラン系諸部族の活動、
 - ・インダス上中流域へのアーリヤ諸部族の進出
- などが続く。後者の一部は紀元前2千年紀半ば、メソポタミアにミタンニ王国を建てた。

その後、

- ・紀元前13-11世紀には「海の民」が小アジア沿岸からエジプトにかけて来襲する。それまで、火山爆発や地震を挟み、地中海東部の覇権を巡る部族連合同士の戦争が繰り返されていた。ホメロスの叙事詩の舞台もこの中に納まる。
- ・ヨーロッパ全体に進出していたケルト諸部族をやがてローマが駆逐し、強大な帝国を築く。ラティウムという集落から出た一握りの若年の男たちが成し遂げた出来事である。
- ・さらに、ゴート族など東ゲルマン諸部族がヨーロッパを席卷し、遅れてフランク族がフランク王国（紀元後5-9世紀）を築く。5世紀には北ドイツ沿岸からブリテン島へ渡った人々が、ローマに追われて同島にあったケルト系の人々、その他の先住民を征服する。
- ・ノルマン人の遠征、「新大陸発見」、メイフラワー号（1620年）と、彼らの闘争と拡大は進んだ。
- ・スラヴ語派の分岐拡大は10世紀以降になって顕在化する。

「世界史」はインド・ヨーロッパ語族の父権的攻撃的拡大に多くを負っている。父権制は闘争を勝ち抜いて部族が拡大するために有効である。ギムブタスは紀元前4000年前後、ドニエプル中下流域に「サティー」の風習を示す墓があることを指摘している。サティーとは、後のヒンドゥー社会において、夫が死ぬと殉死させられた「貞夫人」のことである。

2. インド・イラン共通時代とBMAC, 「アーリヤ」と「アリヤ」

2.1. インダス河は『リグヴェーダ』以来1) *Síndhu-*、複数*Síndhavah*とよばれる。そのイラン語形が2) *Hindu*である。新アヴェスタ語 *Həndu-*, *Hapta Həndu* 「7つのヒンドゥ」はともに「インド地域」を意味すると思われる。古ペルシャ語 *Hi_hdu-* はアケメネス朝支配下のインド地域を指す。3) *Indos*, *Indus*は、このイラン語形から、語頭の*h*を失う小アジアのイオニア方言に由来するものと思われる。それぞれの語形に対応する漢語表現が、1) 身毒、身豆、真

定など、2 a) 賢豆、乾特、県度などとその方言形に基づくかと推測される2 b) 天竺、天毒、天豆など、3) 印度、印土などである。

イランは正確には「イーラーン」*Īrān*であり、「アリヤ*arya*たちの(邦)」を意味する複数所有格に起源する。インドに入った諸部族は別の派生語形「アーリヤ」*árya-*を自称していた。基になったアリ*arí-*は「主人」、「敵」と訳されることが多いが、もともと「部族の成員」を意味し、自分の部族の有力者と敵の部族民についての用法が表面に表れた結果と考えられる。イーラーンの基となったアリヤ*arya-*という語はインドでも用いられ、¹「部族の成員たる資格を持つ者」を、イラン側に対応形をもたないアーリヤ *árya-*（「アーリヤ」、韻律上*áriya-*「アーリヤ」と3音節であることが多い）は「部族成員たる仁義を備えた、部族慣習法に従う」を意味するものと推測される。WITZEL-GOTÔ *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis*. Frankfurt a. M. 2007, 828 s. v. *arí-*参照。因みに、漢訳仏典はアーリヤを「聖」と訳す。²

「アーリヤ」の人々はアフガニスタン方面からカーブルKābul川（『リグヴェーダ』に*Kūbhā*として現れる）に沿って東進し、ヒンドークシュ山脈を越えてインダス上中流域に侵出したものと思われる。

アーリヤの諸部族は、紀元前1500年頃から牛、馬、ヤギ、羊の遊牧をしながら部族単位で順次インド亜大陸に入ったものであろう。彼らは、マルギアナ（マルグシュ、現メルヴMerv付近）、アレイア（ハライワ、現ヘーラートHērāt付近）、バクトリア（バクトリシュ、現バルホBalkh）を結ぶ三角地帯、さらに、南はアラコースィア（ハラウヴァティシュ、現在のカンダハールKandahar付近）、北はオクソス河（アームー・ダリヤーĀmū Daryā）からアラル海周辺（コワレズミー）にかけての地方から、何らかの必要に迫られ、カーブルの峠を越えざるを得なかったものと思われる。これらの故地はザラスシュトラZaraθuštra（ゾロアスター）が新宗教を打ち立てるのに成功した地域と重なる。その地に残ったイラン系の人々は東方へ回避することなく、社会と宗教の改革によって危機を乗り越えたものと考えられる。イラン系諸部族は古くからユーラシア帯を広く移動していた。また、インド・アーリヤ系と考えられる一派も、紀元前16世紀にメソポタミア北部に進出し、紀元前14世紀後半にヒッタイト王国に併合されるまでミタンニMitanni王国を築いていた。古い文献から直接知りうる「インド・イラン共通時代」は紀元

<インド・イラン河川名など>



前3千年紀末のアフガニスタンを中心とする地方における活動を意味する。

インドに現れる河川名にはインド、イラン共通の名称が見られる。サラスヴァティー *Sārasvatī* はアラコースイアのイラン名、古ペルシャ語ハラウヴァティシュ *Harauvatiš* (新アヴェスタ語には現地の方言要素を反映する *Haraxšatī* が現れる) に対応し、「湖、池を持つ (川)」を意味する普通名詞に由来するものと思われる。サラユ *Sarāyu* は、ハームーン湖に流れ込む河川名に遡ると思われるアレシアの古ペルシャ語名ハライヴァ *Haraiva* にはほぼ対応する。これと、新アヴェスタ語、単数対格形 *Harōiium*、さらに派生形容詞 *harōiui-* 「H出身の」からインド・イラン祖語 **saraiu-* が復元できる。スウヴァーストゥ *Suvāstu* には新アヴェスタ語ホヴァーストゥラー *Xʷāstrā-* (現クハシュ・ルード *Xāš-Rūd*) が対応する。後肢の名詞語形は若干異なるが、ともに「良い居住地を持つ (川)」を意味する。スウヴァーストゥは、今日のスワート *Swāt* 川で、カーブル *Kābul* 川がアトック *Attock* 付近でインダス川に合流する少し前に西方北側からカーブルに合流する。クハシュ・ルード、ハライヴァ、カーブルの三河川群の源流は、隣接している。渓谷に沿って東方へ進めば、高度3000m程の峠を越えるだけで、インダス上流に至る。クハシュ・ルード、ハライヴァ、サラスヴァティー、ハリー・ルードはいずれも、内陸で没する。

現在のアフガニスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、カザフスタンに跨る地方には、紀元前3千年紀から「バクトリア・マルギアナ考古複合」(*Bactria-Margiana Archaeological Complex*, 略称 *BMAC*) と称される大規模な城塞都市を擁する定住文明の栄えていたことが考古学的に明らかになりつつある。インド・イラン共通時代の人々は、おそらく紀元前3千年紀末頃に同文化圏に遭遇し、この先進文明から重要な文化要素を取り入れた、ないし、受け容れざるを得ない環境下に置かれたものと推定される。*BMAC* やインダス文明は西方のユーラシア諸都市と交易をもっていたことが各地の出土品から知られており、紀元前3千年紀にはメソポタミアを中心に東西ユーラシアに広がる都市文明ネットワークが存在したと思われる。

ソーマ、ハオマ (麻黄) の使用はインド・イラン共通時代に *BMAC* の文化圏から受容されたものと推測される。ヴェーダにおけるソーマ、イランのハオマが果たしていた興奮剤の役割を嘗ての印欧語共通時代に担っていたのは密酒である。『リグヴェーダ』において *mādhu-* という単語が用いられる場合には、実体詞「蜂蜜」、形容詞「甘い」よりも「蜜酒」を意味することが多く、具体的にはソーマが意図されている。往時にその役割を果たしていた「蜜酒」という語によって、新たに導入され遙かに効果的なソーマを表現したものと考えられる。³ インドラ *Índra* という神名も *BMAC* に由来する可能性が高い。⁴

2.2. デーヴァたちとアスウラたち

『リグヴェーダ』に現れる神々の背景にはおおそ二群が想定される。「神」に当たる語はデーヴァ *devá-* で、天 (輝く天空の覆い) を意味するディヤウ *dyáu-/div-/dyu-* (主格ディヤウス *dyáu-s*, 所有格 *div-ás*; ギリシャ語のゼウス *Zeús* [*Zeús*], 古い時代の発音ではズデウス [*zdéus*], ラテン語には複合語にディウス *dīus* として残る。) から作られた形容詞 **deiyu-ó-* に由来し、ラテン語のデウスに等しい。印欧祖語 **deiyu-/diu-* 「天」の弱語幹形 *diu-* の第一音節に **e* を挿入し、語幹母音 **-o-* を接尾した「ヴリッディ派生」による形容詞「天に存する」に遡る。ラテン語 *dīuos, dīuus, deus*, 古ラテン語 *deiuos* など多くの印欧語における「神」の語と同起源である。⁵ 印欧語共通時代に「天に住む (種族)」と考えられていた往古の神々の系統を引き、自然界の諸現象 (太陽の諸相, 暴風, 雨, 大地など) や英雄神, 機能神を包摂する。火 (アグニ *Agnī-*) やインド・イラン共通時代起源のソーマ *sóma-*, 英雄神インドラも古来の神々のグループに属せられた。宗教の根本は太陽光と祭火との同置に基づく「拝火教」にある。水は女性複数形 *áp-as* で表され、永遠に循環する、生命を持つ女たちであった。医療や救済に関わるアシュヴィン双神 *Ásvin-* は宵の明星 *Násatya* と明けの明星 *Ásvin-* とを巡る神話の合体されたものを核とし、既に印欧祖語時代に一組の神とされていた信仰を引き継ぐものと考えられる。⁶ ディヤウス・ピター「父なる天」という概念はギリシャのズデウス (ゼウス)・パテル, ローマのユピテルと同一の表現に遡り、「母なる大地」(ただし、同一の語形には還元できない) と対をなしていたものと思われる。『リグヴェーダ』においては、「父と母」同様、「天と地」は両数の、しかも、一方を省略した形 (「母たち二人」など) でよばれることが多い。種牛と雌牛として語られることも多い。乙女の姿をした曙ウシヤス *Uśás-* もギリシャ語 **áyhōs* (レスボス方言 *áōs* [*áuōs*], アッティカ方言 *ēōs*

[*héōs*]), ラテン語 *aurora* 「曙」とともに印欧祖語に遡る。天空に関わる神々は『リグヴェーダ』より後の文献ではあまり重要な役割は演じない。インドラは最も好まれ、多くの英雄的行為が彼の勲に帰せられる。

アーディッテャ *Ādityā* 「アディティの息子たち」と総称される神々もデーヴァではあるが、彼らの存在が「アスウラたち」の基に想定される。アスウラ *ásura*-, イラン語のアフウラ *ahura*- は「主、首長」を意味し、元は、アーディッテャ神たちの筆頭に位置する王権の神格化ヴァルウナの呼称であったものと思われる。「アディティの息子たち」つまり「アスウラたち」はインド・イラン共通時代に遡る社会制度の神格化で、ヴァルウナ *Vāruṇa*- (王権), ミトラ (ミットウラ) *Mitra*- (契約), アリヤマン *Aryamān*- (部族慣習法), バガ *Bhaga*- (家族間の財産・獲得物の分配), アンシャ *Ámša*- (個人の取り分), ダクシャ *Dākṣa*- (担当職能についての能力) の六神が属し、しかも、ダクシャは第七の末子とされる。六番目には必要に応じて他の神が入る。八番目にアディティが身籠もった息子は流産させられ、マールターンダ「死んだ卵から生まれた者」と呼ばれる人類の始祖となる。(人は死と一体となることによって元の完全な姿に戻り、天界に帰ることができる。)⁷ 社会制度が神々の姿をとって現れるのは、祭官階級がことば(文書)を独占管理していたことから説明されよう。彼らが、法律、天文、医学、生物学、地理学をはじめ、当時の「世界理解の学」の全知全能を動員して讃歌を作り、祭式を構築し、理論化した跡が窺える。神話、伝承も彼らのことばの文化を経たもののみが伝わる。讃歌を「見た」者たちはリシ *ṛṣi*- (もとは「荒ぶれる者」、一般に「聖仙」と訳される), カヴィ *kāvi*- 「見者、詩人」、ヴィップラ *vīpra*- 「(興奮に) 震える者」とよばれた。

インドでは昔からのデーヴァたちが好まれ、新しく厳格な制度神は畏れられた。アスウラたちは『リグヴェーダ』に後続するヴェーダ散文文献(「ブラーフマナ」, 紀元前800頃から)の段階になると、異部族を守護する「神ならざる神、魔神、悪魔」の群を意味し、仏教文献の阿修羅へと連なる。無論、ヴァルウナをはじめ個々の神々はデーヴァとして崇められ続ける。イラン側では逆にデーヴァにあたるダエウワ *daēuua*- が退けられて悪魔の類と化し、アフウラはゾロアスター教(マズダー崇拜)の至高神アフウラ・マズダー *Ahura Mazda*- 「知恵なる主」の中に受け継がれた。聖典アヴェスタ *Avesta* のガーサー *Gāθā* 「歌」と呼ばれる部分にはゾロアスター (*Zarathuštra*) 自身のことばと思われるものが収められ、そこでは、*Mazdā* 「知恵、理性」(< **Mazdā*-*h*, 人工的な男性活用形)と言われた後に *Ahurō* 「首長[であるところの]」(< **Ahura*-*h*) と付け加えられている。『リグヴェーダ』にも唯一神を求める表現が諸処に現れるが萌芽に留まり、貫徹されなかった。一神教は厳しい部族闘争を勝ち抜くための原理として有効であり、父権制社会を束ねる力を持つ。紀元前2千年紀後半のユーラシア一帯に一神教を求める思想的営為が見られるが、ゾロアスターのマズダー崇拜は東方において事実上それを貫徹した稀な例であり、成功した最初の例といえる。宇宙秩序、真理はリタ *ṛtā*- (「天理」, 原意は「はまっていること、合致していること」, 当時的一种、物理法則)とよばれ、リタに適った真実の(サッテャ *satyā*-, 「[永遠に] 存続する, 事実に適う, 実現する」)ことばによって、神々に実現を要求する詩句を集めたものが『リグヴェーダ』である。ゾロアスター教における最高原理はインドの *ṛtā*- に当たる語からの派生形アシャ *aša*- < **árta*- 「真理」である。アシャがアフラ・マズダーを越えた原理であるところに、純粹の一神教にはなり得ていないとする教学的立場も可能ではある。この関係は、リタとヴァルウナとの関係と等しい。

これら「アスウラたち」の背景にはBMACの社会制度からの受容が考えられる。アーディッテャは「アディティの息子たち」を意味するが、母アディティ *Āditi*- は「拘束を持たない」自由の女神の意味である。アヴェスタにおける大女神アナーヒター *Anāhitā*- は「結び付けられていない女」を意味し、何か基になった女神(名)をインド側とイラン側とにおいて、それぞれ翻訳借用したものと推察される。⁸ 具体的にはBMACから複数出土している(羊毛または水鳥の羽を纏う)女神像の存在が強く示唆される。アディティと息子たちを巡るヴェーダ文献の神話には、父権的なインド・ヨーロッパ語族の遺産とは馴染まない明確な母系の痕跡がされている。『リグヴェーダ』以来有名な「ブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」の背景にも(*Urvāśī*-の語源は「雌羊」である),⁹ パニ族からの牛の「解放」, すなわち、略奪の物語に見られるパニ族の岩造りの防御城塞 *Valā*- にも、BMAC時代の記憶が隠されている可能性がある。「マヌ(またはマヌシュ)の子孫 *manuṣya*-」を自称するアーリヤたちの神々デーヴァが、彼らに勝る神々アスウラたちを、契約を盾にとるなど様々な方策を用いて最後に滅ぼすは物語の背景には、BMACとの戦いが反映されている可能性もある。¹⁰ ソーマを護る射手クリシャーヌの射掛ける矢をかわして、鷲が天上の磐からソーマを地上にもたらす話も同様に解釈できる。

ゾロアスター教、ヴェーダのバラモン教の儀礼に共通してみられる要素、例えば、祭火の礼拝、太陽と祭火との同一視、敷草、ことばの力、などは確実にインド・イラン共通時代からの遺産であり、さらにインド・ヨーロッパ語族の文化を引く要素が大きいものと考えられる。今後、『リグヴェーダ』などにBMAC時代の記憶が反映されている可能性をさらに検証する必要がある。ただし、BMACが文献を残していない以上、全ては状況証拠と個人の判断とに依らざるを得ない。

3. インド・アーリヤ諸部族のインド亜大陸侵入

アーリヤ諸部族のインド侵入の背景には、インド・イラン共通時代に起こった何らかの逼迫した状況の存在が推定される。インド・アーリヤ諸部族は、イラン系諸部族と異なり、故地を離れて東進し、カーブル峠を越えてインダス上中流域に入った。時代としては紀元前1500年頃が想定されるが、直接の証拠はない。西方における何らかの困難を避けるため狭い峡谷を越えて道を東へと辿るうち、アトックAttock付近でインダス流域に達し、その後インド亜大陸に進出したと考えるのが妥当な解釈と思われる。そもそも、地中海からアフガニスタン、中央アジアに懸けて波及した困難な事情がインダス文明をも包摂して紀元前3千年紀にユーラシアに広く栄えた都市文化ネットワークに破断をもたらしたものと考えられる。紀元前2千年紀に入るとユーラシアの交易は衰退し、インダス文明の諸都市も次第にその意味を失うに至る。自然環境の上では、紀元前16世紀に地中海に地震が相次ぎ、紀元前15世紀の中頃にはテラThera（サントリン島）が壊滅する。紀元前13世紀の末には「海の民」とよばれる凶暴な人々が東地中海地方とエジプトを襲い、鉄鋼を生産する山の民を独占管理していたヒッタイト王国を滅ぼし、鉄と鉄鋼の生産を世界に解放する。印欧諸部族は攻撃的移動拡大の跡を歴史に繰り返し残しており、それと軌を一にする攻撃性から判断して、「海の民」にもインド・ヨーロッパ語族に属する者たちが多く加わっていたであろう。もともとは、ユーラシアの西方で起きた動乱の原因は急激な人口増大と背後にあった天変とに求められるであろうか-に起因すると思われる急激な変動が、一方ではインダス諸都市文明の姿を解消し、一方では遅れてアーリヤ諸部族のインド亜大陸への侵入をもたらした、と考えることが最も効率の良い説明と思われる。アーリヤ諸部族は彼らの家畜たちの牧草を求めながらやっとのことで東方に新世界を見出したのであり、彼らにとってはサヴァイヴアルの問題であったろう。

4. 『リグヴェーダ』とアーリヤ諸部族、祭式の整備

インドの地に入ったアーリヤの人々が最初に編集したのが、讃歌集『リグヴェーダ』である。相対年代からは紀元前1200年頃のことと想定される。各家系に伝えられた1017讃歌、1万以上の詩節が一定の編集方針の下に収録され、今日に伝わる。編集からは、アーリヤの諸部族が互いに連絡を取り合い、「アーリヤ」としての統一を保っていたことが窺われる。伝統的に祭官の各家系に伝えられた讃歌を集めて編集し、宇宙を維持し、部族を繁栄させるための道具として固定した。祭官学者階級はこれらを基に次第に祭式を整備してゆく。「ことば」の重視は彼らの一大特色で、後の時代にまで続く標準語化の強さもこれと関連するであろう。異部族の者たちは「ぞんざいな、はつきりしないことばを持つ者」*mṛdhrá-vāc-*、「(正しい)口、すなわち、ことばを持たぬ者」*an-ās-*などと言われる。ことばの発音形態のレベルが重視され、パーニニ文法(Pāṇini, 紀元前4世紀前半)も単語に区切られた形ではなく、続けて発音される形を問題としている。詩人たちが理法の認識に基づいて「見た」詩句には、真実・事実(サッテヤ*satyá-*)にかなったことばがもつ実現力が籠もっている。そのようなことばがブラフマン*brāhmaṇ-*の原義である。ブラフマンは後の哲学的思弁の中では「宇宙の根本原理」という地位を占めるに至る。宇宙秩序、真理、理法に当たる概念は「はまっている、合っている」を意味する過去分詞リタ(ルタ)*ṛtā-*で表された。「天理」と訳せる。ただし、リグヴェーダより後の時代になると「天理」よりも、それぞれの立場で守らなければならない*dhárman-*(リグヴェーダ語形、中性名詞)、*dhárma-*(後の語形、男性名詞)、真実・事実(サッテヤ)が問題にされる。リグヴェーダでは、過去・現在などの時の表示をもたない動詞形が多用され、ホメロスの叙事詩のような出来事を「報告」する「物語」ではなく、知っているはずの宇宙秩序、真理や共通体験に「言及」する、歴史を

越えた文学という性格を中核とする。

個々の讃歌の原型は山岳地帯やステップにおけるインド・イラン共通時代の生活に置かれ、定住期をまじえた遊牧・掠奪中心の生活が反映されている。現存する『リグヴェーダ』讃歌がインダス上中流域で最終的な形を得たことは確実であり、当時の詩人が往時の詩を模したものを中心に、独自に作った讃歌や詩行・詩句を交えている。牛、馬、羊、山羊の遊牧を生活の中心に置く移動生活を主とし、おそらく3ヶ月前後の定住期に大麦*yáva*-を栽培していた。現実とはかく、彼らは牛によって生きていると信じていた。大麦はインド・ヨーロッパ祖語に遡る語彙である。小麦は『リグヴェーダ』には現れず、次の時代(アタルヴァヴェーダの一伝承Paippalāda-Saṁhitā, ヤジュルヴェーダ・サンヒターYajurveda-Saṁhitā)に*godhūma*-という形で現れる。語形は文字通りには「牛の煙」を意味し、イラン語形が別であること(新アヴェスタ語*gaṇtuma*- など)から、後に伝来した借用語の改変であることが明白である。定住期(*kṣéma*-)には、後の仏教における「雨安居」*varṣa*- (パーリ語*vassa*-)を思わせるところがある。雨安居というのは、雨期に教区の僧が二ヶ月または三ヶ月間、在家者の支援を仰いで一箇所に住み、合宿生活を送ることをいう。僧はそれ以外の時期には、乞食生活をしながら各地を「遊行」(*pari*-)*vraj*する。動詞*vraj*は生活域外の、特定の者に属さない未開地*āranya*-「原野」を越えて移動するときに用いられる語であることは注意されてよい。仏教僧の生活には、かつてのアーリヤ諸部族の生活を追体験する要素がある。

「ヴェーダ」*vēda*-はバラモン教聖典の総称で、「(ものを実現する)知識」の意味に由来するものと思われる。ドイツ語*wissen*「知っている」、ギリシャ語のイデア*idéa* (<**uidēā*)「見かけ、様態、原像」、ラテン語から現代諸語に移入された*video*などの基にある動詞**ueid*/*uid*「知る、気づく」から作られた名詞である。讃歌の各詩節をリチ*ṛc*-とよび、神々への讃歌を集めた聖典の意味でリグヴェーダ*R̥gveda*と名付けられていた。「リグ」はリチに有声音が後続するときの形である。伝承は文字を介さず口伝により、祭官階級によることばの文化、文書の独占を可能にした。『リグヴェーダ』を伝承したのは祭官職「ホートリ(ホータル)」*hótar*-/*hótr*-の家系である。ホートリは「(祭火にバターなどを)注ぎ献ずる人」を意味し、イランのザオタル*Zaotar*-「祭官、司祭」に当たる。ゾロアスターは自らをザオタルと称している。『リグヴェーダ』が最初に編集された後、アーリヤ諸部族の祭官たちは(おそらくアドヴァリユ*Adhvaryú*-とよばれる祭式の具体的実行を司った「経路を辿る」祭官たちの主導の下に)大規模祭式から順次整備をはじめ、各種の祭官専門職を動員して役割を与え、祭式に必要な道具として先ず祝詞(*mántra*-マントラ、「真言」)を集成した。アドヴァリユ祭官たちは引き続き、紀元前800年頃から、マントラの効力を保障し、祭式の実行、構成を理論化するための神学テキスト「ブラーフマナ」*brāhmaṇa*-を編集する。これらの散文文献から、当時の生活実態が『リグヴェーダ』より一層明確になる。それでも限られた枠組みで語られる制約があり、実生活の把握にはずっと後の仏典、特に語り物であるジャータカ*Jātaka*(本生譚)などの助けを借りる必要がある。インドにおける実際の生活の保守性から、見込みのある研究対象であるが、将来の課題である。ヴェーダ祭式が宇宙秩序の維持、部族全体に関わる祭事など大きな枠組みから整備されはじめ、個人や家族身辺に関わる祭礼、葬礼の整備が後回しにされたことは、彼らの理念を理解する上で(例えば、儒教をはじめ東アジアの精神風土との対比で)注意しておくべきである。

5. アーリヤ諸部族の東進

5.1. 『リグヴェーダ』に描かれる具体的な地理情報は少ないが、インダス流域からサラスヴァティーへ進出したことが彼らの生存拡張にとって決定的であったと推測できる。サラスヴァティーこそが彼らのインドの地における本拠地、故郷となる。

「十王戦争の歌」として知られる『リグヴェーダ』第VII巻第18讃歌はヴァシシュタ*Vāsiṣṭha*-を祭官に擁するトリッツ*Tṛitsu*-族の王スダース*Sudās*-がインダスの一支流パルシュニー*Pāruṣunī*- (現ラーヴィー *Rāvi*川)をめぐる戦いにおいて十王の連合軍を破ったことを背景としている。連合軍の側にはアーリヤの部族名と思われるもののほか、異部族と思われる名も挙げられている。スダース王は別の箇所(III 33)において、ヴィシュヴァーミトラ*Viśvāmitra*-を祭官としてバラタ*Bharatā*-の一族を率い、インダスのさらに東側の支流であるシュトゥッドリー*Śutudrī*- (現サトルジ*Satluj*, *Sutlej*)とヴィパーシ*Vipās*- (現ビアース*Byās*, *Beas*)の流域に至り、この地を確

保して両河を渡り果せている。

IV30, 8-11には、祭官ヴァーマデーヴァ *Vāmadēva*-の支援する（または、率いる）部族がヴィパーシの畔で女族長に率いられる現地の部族を打ち負かしたことが暗示されている：「この勲をもまた、つまり君は、インドラよ、成し遂げた、雄々しい行為を、君が恐ろしく気を荒立てる女を打ち殺したという、天の娘を。天の娘であったとしても、つまり、偉大な者は、尊大にふるまうウシャス（曙の女神）を、インドラよ、君は粉碎した。ウシャスは粉碎された荷車から、そう、逃れ去った、牡牛（インドラ）が彼女を突き倒すことになる」と恐れて。ここに彼女の荷車は横たわっている、完全に粉碎されてヴィパーシの「畔」に。走り去った、「彼女は」かの最果ての地へ」。アーリヤ系の部族は女性に率いられることはない。おそらく遭遇した現地の母系的部族との抗争を謂うものであろう。女性部族長は「天の娘」を自称し、詩人はそれならば曙の女神ということかと皮肉を込める。ウシャス *Uśās*- とよばれる曙はギリシャ語のヘオース、ラテン語のアウローラ等と同一語源に遡り、広く「天の娘」とよばれるからである。アーリヤの支配者、祭官は戦車に乗って移動することを原則とする。女子供は荷車を用いたらしい。ここでは、現地の女部族長が荷車を用いている。この『リグヴェーダ』に語られる領土争いは、後の二つの散文文献（紀元前800年頃）に語られるヴァーマデーヴァと女部族長（または祭官）の戦車競争に語られる伝説と同一の「史実」に言及するものと考えられる。そこでは、女性はクスイターイー *Kusitāyī*-またはクシダーイー *Kusidāyī*-という名であるが、明確に非アーリヤ語形である。アーリヤ系の語であれば、*u* の後で *s* は規則的に *ṣ* [ṣ] に変化するが（rukiの法則）、ここでは *s* が現れるからである。戦車競争は部族間の紛争（テリトリー争い）決着に用いられた手段である。伝承では、クスイターイーは体当たりによってヴァーマデーヴァの戦車を壊そうとするが、ヴァーマデーヴァは膝の上に置いていた部族の火（移動中の習俗を象徴。移動の際には、部族長または筆頭祭官が戦車に乗り、部族の火を保持する）に目をやり、現在『リグヴェーダ』に収録されている一讃歌を「見る」（つまり、作る）。すると火が全面展開の布陣をとってクスイターイーに焼きかかり、彼女はクスイタ（またはクシダ）の池に逃げ込んだ。現実にある地名と結びつけて「史実」に真実性を与える一種の論証である。また、その際に用いられる文体から、この池は彼らに周知の地名であったことが解る。

5.2. ブラーフmana文献（ここでは、ヤジュルヴェーダ・サンヒターの *brāhmaṇa*-部分と、*Brāhmaṇa*-という名を冠する独立テキストを合わせてよぶ）の時代には（紀元前800-600年頃）、アーリヤの諸部族は既にインダス流域を東方へ越えて拡大し、サラスヴァティーを拠点としてさらに植民活動を進めた。サラスヴァティー流域をテリトリーとして確保し得たことがアーリヤ諸部族のその後の展開を可能にした、極言すれば歴史から消えずにすんだ契機となったように思われる。以後、サラスヴァティー流域はアーリヤ諸部族の故地と見なされ、サラスヴァティーは聖なる川となる。

『シャタパタ・ブラーフmana』にはヴィデーハ国の建国神話が収録されている。部族長ヴィデーガ・マータヴァ *Videghā- Māthavā*-は部族の火（*agnī- vaiśvānarā*-「各人、皆に属する火」）を口の中に保っていた。マータヴァの名はギリシャ神話のプロメテウス *Promēthēus* に繋がり（原義は「泥棒、こそ泥」あたりか）、天上の火を盗む古いインド・ヨーロッパ語族の神話の反映が見られる。彼に筆頭祭官（プローヒタ *purōhita*-）ゴータマ・ラーフーガナ *Gótama- Rāhūgaṇā*- が話しかけてもマータヴァは答えない、「皆に属する火が、私の口から漏れ落ちてはならない、と考えて」。祭官が「液体バター」という語を含む『リグヴェーダ』の詩句を唱えかけると、火はヴィデーガの口からこぼれ出て、大地に達する：

その時、ヴィデーガ・マータヴァはいた、サラスヴァティー[川] のところに。それは、その場所から、東へ向かって燃えつつ、進んでいった、この大地を。ゴータマ・ラーフーガナとヴィデーガ・マータヴァとは、燃えているそれに従って、あとから行った。それはこの（地上の）一切の川たちを越えて燃えた。―― サダーニーラー（現在のガンダック川に比定される）というのは北の山から流れ出している。―― それを（火は）越えて燃えなかった。そういうその[川] を、以前は、婆羅門たちは渡らないものだった、「皆に属する火によって、（この川は）越えて焼かれなかった」と考えて。そこより東に、今は、多くの婆羅門たちがいる。そこは、まさしく、どちらかといえば居住に向かなかった、まさしく、どちらかといえば水っぽかった、「皆に属する火によ

ておいしくされていない」という（訳で）。そこは、だが、今は、まさしく、どちらかといえば居住に向いている。婆羅門たちが、また、今やそれを祭式たちによって「おいしくした」のだから。それ（サダーニーラー川）は、炎暑の後半でさえ、まさしく、[ひとを]震え上がらせる。それほど冷たい。皆に属する火によって、越えて焼かれなかったから。そこで、ヴィデーガ・マータヴァは言った「私はどうしたらよいのか」と。「ここよりも東方に君の居場所がある」と（火は）言った。その（川）は、今でも、コーサラとヴィデーハの人々（国）の、この境界線である。彼ら（この両側にいる人々）は マータヴァの子孫であるから。

「おいしくする」（動詞 *svad*, 英語 *sweet* 等と同源: *svāda*^{-le}, *svāda*^{-ti}, *svadāya*^{-ti}, ここでは *āsvaditam*, *āsiṣvadan*) という語は焼き畑によって作物、牧草を耕作することを謂うもので、野生動植物への忌避とともに彼らの「文化主義」を示す表現である（→ 6.4.）。焼き畑と耕作の実態はブラーフマナ文献から回収できる。新開地は「新しく焼いた土地」*navadāvā-*とよばれる。さらに、「新しい入植地」*nāvāvasāna-*参照。「世界」を意味するローカ *lōka-* は語根 *roc/ruc* 「光を放つ」からの派生名詞であり、もともと、ドイツ語で「光」とともに、林間の火をかけて焼き払った土地を意味する *das Licht*（今日では一般に *die Lichtung*）であった可能性が高い。（原義は「光の届く場所」か。『リグヴェーダ』X 88, 6 参照:「アグニは、夜の間、世界（存在するもの *bhū-*）の頂点となる」、つまり、火の届く範囲が世界である）。日本語の「世間」は仏典に現れるこの語の複数処格形 *lōkeṣu* に由来する。

5.3. アーリヤの諸部族は『リグヴェーダ』以来、子孫繁栄、家畜の増大に意を注ぐこと急で、彼らの拡大の背景には人口増大が考えられる。同時に、「アーリヤ」の語は「部族の生活習慣に従う」を意味し、必ずしも血族に基づく単一部族社会を意味しないと考えられる。この一種の普遍主義（現代の「グローバル化」を想起させる）がアーリヤ文化とインド・アーリヤ語による標準語化に果たした役割は軽視できない。アーリヤ諸部族の植民活動については複数の言及が回収できる。カタ・サンヒター *Kaṭha-Samhitā* XXVI 2:123, 17（紀元前 8 世紀頃）、バウダーヤナ・シュラウターストラ *Baudhāyana-Śrautasūtra* XVIII 45（紀元前 5 世紀頃）¹¹ は東方への拡大に言及し、マイトラーヤニー サンヒター *Maitrāyaṇī Samhitā* IV 7, 9:104, 14f.（紀元前 8 世紀）は南への進出を記録する。ジャイミニヤ・ブラーフマナ *Jaiminīya-Brahmaṇa* III 146（紀元前 6 世紀?）には北へ息子たちを派遣する記述が見られる。タイツティリーヤ・サンヒター *Taittirīya-Samhitā* II 5, 2, 7（紀元前 8 世紀後半?）は長男を派遣すると言い、アイタレーヤ・ブラーフマナ *Aitareya-Brahmaṇa* VII ほかに伝わる「シュナッパシェーパ *Śunaḥśepa* の物語」（紀元前 6 世紀?）では 100 人の男児のうち、年長の 50 人が追い出され、新天地を求める。ヴェーダ祭式においては、理念上の舞台が往時の移動時代の生活に置かれ、植民活動が模倣的に再現される。ブラーフマナから古ウパニシャッドに懸けての時代には、アーリヤ諸部族は、上記のヴィデーハ建国譚に見られるように、ガンジスの北岸に沿って今日のビハール *Bihār* 地方にまで広がっていた。ガンジスの南岸にアーリヤ文化が拡大するのは仏教、ジャイナ教興起の時代であり、マガダ *Magadha* の建国と関わる。¹²

6. まとめと課題

6.1. ことばの力

アーリヤ諸部族は祭官・学者階級が管理する統一的理念によって導かれた。彼らは天理（*ṛtā-*）、真実（*satyā-* 中性単数実体詞）に基づく実現する（*satyā-* 形容詞）ことば（*brāhmaṇ-*）の表明によって世界と現実社会の秩序を維持し、理念と要求の実現を画策した。人々と神々との間には give-and-take の関係があり、正しい言葉の持つ実現力が神々を動かす。¹³ マントラにおいて、神々への呼びかけに用いられる動詞のムード（法）は接続法、命令法を中心とし、話し手（祭官）の意思が神々の行為を実現させるという構造で表明される。願望や祈願は二次的役割を持つに過ぎない。祭官学者（*brahmāṇ-*）は、ブラフモーディヤ *brahmōdya-* 「ブラフマンを巡る議論 *ūdya-*」と後に名付けられる「ことばによる決闘」によって神学論争を行い、理論を積み上げ、精緻なものとして構築していった。『ウパニシャッド』はそうした営為の帰結と見なしうる。「積み上げ」と表現したのは、先行する議論を前提としてその上に議論を加えるという性格が強いことを示唆するものである。新たに大原則、「公理」を書き換えるよ

うな革命は起こらなかった。仏教の「生老病死」(四苦)がブラーフマナ文献において展開しウパニシャッドにおいて確立された「業と輪廻」の理論を前提として組み立てられ、「生苦」がブラーフマナ以来の「天界における再死」から出発していることも、そうした保守伝統主義から理解できる。¹⁴ ブラフモーディヤにおいては、問う者が三度まで問いを出し、答える者が三度の問いかけに答えられないと「頭が弾け飛ぶ」とされた。法華経の「頭が七つに弾ける」はこれを引き継ぐ表現である。マガダ国における仏教教団の地位確立の契機となったブッダと大婆羅門学者ウルヴェーラ・カッサパ(「Uruvelā 川の亀」)との論争対決の中身が伝えられていないこと、論争・問答を基本原則とするインド思想界において答えを出さずに論争に勝利したとされるブッダの「無記」とは、この意味で特別注目される。

古代インドの世界理解はことばを中心に組み立てられた。ブラフマンはやがて「宇宙原理」の位置に上る。インド思想史を支配する観念主義、主知主義的原則、全てを認識論のレベルで詰めてゆく性格はこの出発点と関連しているように思われる。『リグヴェーダ』に見られる創造讃歌は、帰するところ、詩人のことばの中の出来事を語っていると捉えることができる。プラトーンのある対話篇によると、ソクラテースは自己を知るために外の世界を詳しく検証するという方法をとったそうであるが、後代インドのヴェーダーンタ学派は「逆に(内側に)向かうアートマン」*pratyagātman*-という概念を立てる。直接自己を内省する方向である。アテーナイという転換点と離陸、それを受け継ぐ西洋文明の一性格を象徴しているように思われる。ただし、どちらにも、天の摂理をも含めた真実事実の重視という性格は強い。

6.2. 契約

契約の実行は『リグヴェーダ』以来のヴェーダ文献に顕著な概念である。アーリヤの守護神デーヴァたちが契約を盾に勝利し、権力圏を拡大してゆく一例は注10に触れた。ヒッタイト語の資料が多量に出土したのは、国家(部族)間の取り決めを記した契約文書が保管されていた公文書館(archive)が発掘されたためである。契約文書は何年か毎にコピーを作り、複数の要所に保管されていた。メソポタミア一帯の歴史環境の中で成立した原理かも知れない。「アーリヤ」は、元来、「部族成員の慣習に従う」意味であり、契約遵守はアーリヤの中身であるダルマ*dhárma*-の中の重要概念である。ダルマには、今日の「グローバル・スタンダード」を想起させるところがある。¹⁵

6.3. 移動生活と技術や蓄財の軽視

インド・イラン共通時代、そしてインド・アーリヤの諸部族は遊牧民の常として家畜以外の財産、技術の維持携行を重んじていなかったように思われる。ヨーロッパの社会生活において、整理整頓が重んじられることの中には、移動生活の遺風が見られるかも知れない。ヴェーダ文献においては、革鞣し、飲食物調製などに携わる技能者は一括して「努め励む者」*śāmitar*-の名で表された。例外的に、インド・ヨーロッパ祖語に遡る*tákṣan*-「大工」(ギリシャ語*téktōn*)があり、さらに、肉切り職人に遡ると推定されるトヴァシュトリ*Tvāṣṭar*-が神名として現れる。アーリヤ部族の神トヴァシュトリはリブリブ*Rbhū*-と総称される3人の神々が良い木材から四つの立派な杯を製作するのを見て恐れ、女たちの中へ身を隠してしまう。リブリブたちはソーマの質にも詳しく、本来アーリヤ社会の外にあった異部族の技術者に遡ると推定できる。語源的にはギリシャ語のオルペウス*Ὀρφεύς* [*Orphéus*]と同起源であり、「小さい者、(社会的)弱者」から出発していると推定される。ヴェーダ時代には戦車と織物とが技術の粋であったが、戦車職人の身分は、後の時代に至るまでアーリヤの人々の外に置かれていた。織物はアーリヤ社会の女たちの担当領域であった。少し後の散文文献の語るところによれば、轆轤を用いる焼き物は「アスウラの」であり、土器職人はシュードラとされる。祭式用の焼き物を製作する場合にはアーリヤの祭官が往時のプリミティヴな製法によって造る。このことは、日常生活には「異部族」が作ったより上質の焼き物を用いていたことを示唆する。金属器についても同様のことが言えるであろう。¹⁶

『リグヴェーダ』に見られるアーリヤ諸部族は季節的に「牛探し」と称する略奪行、遠征を行った。季節的には春先、夏などが確認されるが、水の来る前の河川路を利用して移動したものと思われる。¹⁷ さらに、「7つの秋の防御柵(ブルブル*púr*-)」という表現からは、農作物の収奪行が推測される(→注12)。¹⁸

6.4. 文明と野蛮

「おいしくする」という表現が焼き畑によって原野を開墾し、大麦や牧草を栽培することを意味することは5.2.に述べた。彼らは牛、馬（両者が「大きい家畜」とよばれることはローマに共通する）、羊、山羊（同じく、「小さい家畜」）を飼育し、野生動物を食することは表に現れない。¹⁹ これら四種の「家畜」（さらに、大麦、『リグヴェーダ』より後には米も、これら「家畜」の中に列挙される²⁰）は人間の集団（*grāma-*、後には「村落、集落」の意味になる）に属する家畜たち（*grāmyā- páśu-*）とされ、*āraṇyā- páśu-*「原野、森林に属する獣」と区別される。*āraṇyā-* は *āraṇya-* から造られた形容詞で、*āraṇya-* の原義は「よその（*āraṇa-*）土地」である。²¹ 豚や犬は印欧祖語に遡る語彙であり、人間の集団域に生きていたものと思われるが、「村落に属する家畜」には含まれず、両義的である。「天の赤い猪」ともよばれるルドラ *Rudrá-* は後のシヴァ神の祖型とされるが、弓矢を持ち山に棲むとされ、野生動物との関わりが深い。

「神々は生のもの、調理されていないもの（火の通っていないもの）は食さない」という言辭はヴェーダ散文以降散見する。「酸乳（*dādhi-*）は村落に属する、蜜は原野に属する」とも言われる（*Taittirīya-Saṃhitā* V 4, 5, 2）。ある種の穀物食にヤヴァーグー *yavāgū-* という名のものがあるが、*krūrā-* であるとされる（同VI 2, 5, 2）。「流血の、生の、血生臭い、残忍な」を意味する形容詞 *krūrā-* は中性単数で出血傷を意味することが多い。ヤヴァーグーが実際にどのような食物を意味するのか未確定の部分があるが、²² 「文明と野蛮」の文脈で再検討する余地があるように思われる。祭式に供物として用いられるのは人が栽培・飼育（cultivate）するミルクと大麦（後に米も）の製品が中心である。野生動物、蜜、胡麻などは通常の献供の対象とはならない。胡麻は祖霊祭において中心的役割を果たすが、祖霊たちが暮らす領域をどのような場所に想定していたかという問題と関わるように思われる。鳩麦（ジュズダマ）が移動して去った後の居住地に属するとされる記述も注目される。²³

6.5. 拡張主義

『リグヴェーダ』とそれに続くヴェーダ文献群には子孫と家畜たちの増大、支配圏の拡大に対する重大な関心が繰り返し表明されている。異部族およびアーリヤ内部の部族闘争にも激しいものがあつたことが窺われる。敵対者には「敵」に当たる語彙が用いられるのは当然であるが、『アタルヴァヴェーダ』以降、「ライヴァル」の意味で元来兄弟の息子たち、つまり「甥」を意味する *bhrātr̥vya-* が主として用いられることが目を引く。王、部族長に嫁いだ女たちの間でも競争の激しかったことが窺われ、女または娘の勢力拡大には「広がり支配する」と「輝き拡がる」の両様に解釈可能な動詞 *vi-rāj-* が用いられる。

インド・ヨーロッパ語族拡大の歴史に繰り返し登場する派遣・遠征のヴェーダ文献における記録は5.3.に挙げた。若年層の男児を追い出し、よその土地に新たな暮らしを求めさせる形式が主である。インド・アーリヤの一分派と思われるミタンニ、さらに、アナトリア語派のヒッタイト王国、海の民、イタリック語派のローマの建国、西ゲルマン語派の一部族フランク王国などがこのタイプを代表すると思われる。東ゲルマン語派のゴート族²⁴、ブリテン島に移住した西ゲルマン語派のアンゲル、ザクセン、ユートの一部、最終的に現在のドイツの山側に定住地を得たフランク族の一派、バイエルン族などは一族揃って移動拡大したものと思われる。「ハーメルンの笛吹き男」の物語の背景には、13世紀に若年層の男女同数が東ヨーロッパに送られたという史実が反映されているように思われる。また、当時そのような移植を斡旋した商売人の存在も窺われる。

インド・ヨーロッパ語族の父権制は勢力圏の拡大に有効であった。²⁵ ギムブタスはインド・ヨーロッパ語族が黒海沿岸からドナウ河口に進出し、ヨーロッパに拡大する以前には母権的社会が優勢で馬の飼育は知られず、戦闘の跡はなく、村落に防御施設はなく、城塞都市も存在しなかったという。²⁶ インド・ヨーロッパ語族はギムブタスが触れない東方においても（BMAC、場合によっては楼蘭も）母権的でないし、少なくとも女性が大きな役割を担っていた「文明」の中を突き進み、その男権的原理によって競争に勝ち抜き、支配権を拡げていったといえる。*ārya-*「アーリヤの人々に該当する」（もともとは、おそらく「部族の成員の慣習に従う」）の *dhárma-* には、この意味で、父権的「文明」を言う側面があり、母系文化との衝突が背景にあるかもしれない。それがまた「文明と野蛮」という定規であった可能性が考えられる。5.1.をも参照されたい。

家長である男子が民会（『リグヴェーダ』に見られる *vidátha-*、原義は「分配の決定」、がこれに当たる）におい

て諸事を決定する制度は印欧祖語時代に遡るように思われる。有力家長には部族を代表する裁量権があったらしく、*svadhā-*「自己決定権」の語で表された。例えば王権の神格化であるヴァルウナは*svadhāvan-*「自分で決定する資格をもつ者」である。家長が民会を通じて支配決定する社会制度が想定され、周囲には契約によって連携または敵対する異部族集団があった。民会に出席する「個人」の資格が重んじられたことと、カミソリがインド・ヨーロッパ祖語に遡る数少ない「利器」を表す語彙の一つであることとの間には深い関係がある、というのがカール・ホフマンの見解である（口頭による）。民会には髪を短くし、髭を剃って「顔」を示す必要があり、カミソリはいわばパスポートに当たるといっているのである。ドイツ、デンマークの北海沿岸地方から多量に出土する青銅製のカミソリはこの意味で興味深い。それらは埋葬品と思われ、夜の太陽光を船上に救い上げて運ぶ金星に源をもつ双子の神が描かれていることが多い。²⁷ ヴェーダ祭式に組み込まれた新月祭、満月祭前日の行事は、元来、民会（*sabhā-*）と関連していた可能性が考えられる。その日はウパヴァサタ*upavasathā-*（「侍って夜を過ごすこと」）とよばれ、祭主は髪髭を整えて望んだであろう。ウパヴァサタは仏教の「布薩」の原型である。このような印欧語族の制度習慣の中には、ある種の「民主主義」、「個人主義」の要素を見出すことができる。ただし、古い文献における「個人」とは、家長の男子だけを意味した。「男たち」（*vīra-*）は家畜たちと並んで財産目録中に列挙される。この事情もローマに共通する。女たちは部族に属するのではなく、各家長に属した：「女たちに属する仲間関係（諸々の連帯というものは存在しないのです。ここにあるのはハイエナたちの心臓です。」（『リグヴェーダ』X 95, 15, 天女ウルヴァシーのせりふ）。「ハイエナ」（「狼よ、去れ」を語源とする）は狼つまり男たちが連帯して手に入れた獲物の残り、分配に与る存在であることを謂うものであろう。²⁸ 家長の「個人主義」と関連して、一夫一婦制の原理についても確認しておく必要がある。宇宙の運行秩序や部族全体に関わる事項についても、ヴェーダ祭式は常に祭主夫妻によって担われるものとされた。1.2.に触れたように、ギムプタスは印欧語族の出発点と推定される彼女のいう「クルガン文化」の墓に後のヒンドゥーに知られるサティーの風習が見られることを報告している。²⁹

人類の歴史は、これまで、インド・ヨーロッパ語族の拡大を支えてきた部族闘争のイデオロギー、経済戦略によって押し進められ、「世界史」へ向かってと展開してきたといえる。略奪は一種の経済行為であった過去がある。前進拡大が善であり、「右肩上がり」の理念が追い求められた。そのためには常に新たなフロンティアが必要とされた。最後に残るアフリカがフロンティアでなくなる時まで、現在の「グローバル化」は地上を均して回転し続けるように思われる。『リグヴェーダ』をはじめとする古代インドのヴェーダ文献はそうしたイデオロギーを理解するために、明解な判断材料を与えてくれる。ただし、どこまでが部族闘争を軸として生物的拡張を戦略とする人類普遍の必然性であり、どこまでが移動生活に根ざす部族にとっての普遍原理に帰するのか、また、どこまでが世界史を主導するに至ったインド・ヨーロッパ語族固有の要素に遡るのか、立ち入った検証が必要である。³⁰

注

- 1 新アヴェスタ語、古ペルシャ語に「アリヤたちの邦」、「アリヤたちの川の遡り」などの表現が見られる。「イーラーン」の基になった**ariā-* (*arya-*) の語頭のアは短母音であり、「アーリヤ」と長母音であったと仮定すると、現在の国名は「アーラーン」となっていた筈である。
- 2 しばしば「アーリア」という表記を見ることがあるが、ギリシャ語、ラテン語の地名、民族名表記に多い女性語形 …イアー (*-iā*) または …イア (*-ia*)、例えばギリシャ語 *Italīā* 「イタリアー」、*Arabīā* 「アラビアー」とそれに基づくラテン語、さらに英語、*Italia*、*Arabia* などに倣ったものと思われる。しかし、古インド・アーリヤ語（サンスクリット語）原典に上記のように用いられている以上、日本語では「アーリヤ」（または「アーリャ」）が望ましい。欧米語を経由して「アーリア」とする理由はない。さらに、欧米語では語頭のアの長短を区別することができないが、日本語では「アーリヤ」、「アリヤ」と区別することができる。ギリシャ語、ラテン語の接尾辞 *-iā*、*-ia* は女性名詞を作る印欧祖語 **-ieh₂-* または **-ih₂-*（女性単数主格形は無語尾）に遡り、インド・イラン語派の接尾辞 **-iā-* (*-ya-*) は **-iō-* に遡る（男性または中性、男性単数主格形は+語尾 *-s*）。
- 3 永ノ尾信悟教授から昔聞いたことと記憶するが、第2次大戦中、ドイツ空軍兵は戦闘機に乗り込む時「気付け薬」として密酒を与えられたとRau教授（Marburg）が話していたそうである。この大戦中には米軍は麻黄（エフェドラ）のアルカロイドであるエフェドリンの化学合成に成功しており、心拍数を上げ眠気を遠ざける興奮剤に用いていたという。Rau教授の話が本当だとすると、第二次大戦のドイツ空軍と米空軍との戦いは、印欧語族共通時代の古い密酒対インド・

イラン共通時代に知った新薬ソーマの戦いであったことになる。因みに、米軍の用いたエフェドリンが今日まで尾を引くシャブの基になっている。

- 4 *Īndra-* という語形は印欧語としては異例である。音節構造に関する実現法則からは **yadra-*, **ya-n-dra-* が期待される。
- 5 ギリシャ語のテオス *θεός* [*ἰεός*] 「神」はこれとは異なり、ラテン語 *festum* 「祭礼」、*fānum* 「寺院」などと同族の別の古い語彙に遡る。古インド・アーリヤ語には、ディシャナー *dhiṣāṇā-* (祭礼の女神) などに残る。
- 6 Toshifumi GOTŌ “*Aśvin- and Nāsatya-* in the Rigveda and their Prehistoric Background”, *Linguistics, Archaeology and Human Past in South Asia*. Edited by T. OSADA, New Delhi 2009, pp.199-226参照。
- 7 後藤敏文「人類と死の起源 —リグヴェーダ創造讃歌 X 72—」*仏教文化学会十周年・北条賢三博士古稀記念論集『インド学諸思想とその周延』* 2004, pp. 415-432参照。
- 8 Cf. T. GOTŌ, “*Vasiṣṭha und Varuṇa in RV VII 88 —Priesteramt des Vasiṣṭha und Suche nach seinem indoiranischen Hintergrund—*” (*Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik. Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 2. bis 5. Oktober 1977 in Erlangen, herausgegeben von Bernhard FORSSMAN und Robert PLATH, Wiesbaden 2000, 147-161*) 160f.
- 9 Cf. 後藤敏文「新資料 *Vādhūla-Anvākyāna* の伝える『*Purūravas* と *Urvaśī*』物語」, 神子上恵生教授頌寿記念論集『*印度哲学佛教思想論集*』, 2004年3月, pp. 845-868; 「資料 ヴェーダ文献に見られるブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」, 『*愛の神話学*』篠田知和基編, 名古屋 2011年3月, pp. 435-480。
- 10 契約とその狡猾な履行・要求の例を後の文献をも含めて『*神話事典*』(準備中)の原稿から例示しておく:

ヴィシュヌ *Viṣṇu* の項から: プラフマナ文献には、既に、後の叙事詩、プラーナに有名なアスウラたち(後にはバリ *Bali*) との領域争いの神話の萌芽が見られる。即ち、矮人(ヴァーマナ *vāmana-*) の姿をした彼が歩む三歩の範囲を神々(デーヴァ) たちが譲り受けるというアスウラとの契約を基に、天空地全てを歩み収めたとする土地争いのモチーフである。[ペンシルヴェニアの「インディアン・ウォーク」1737年。ベン一家によるルナビ族からの土地の収奪を参照] —『*マハーバーラタ*』でもヴィシュヌは大いに詐術をおこなう。乳海攪拌の際には女に化けてアスウラからアムリタを奪い (I 16), 天を飛翔するガルダの望みを逆手に取って彼を自分の旗印とし (I 29), 強力な魔神マドゥ *Madhu* とカイタバ *Kaitabha* の願いをかなえつつその命をとる (III 194)。

ナムチ *Nāmuci*: 『*リグヴェーダ*』以来インドラ(および、アシュヴィン)の敵として現れる魔物。インドラは水泡を用いて、その首をねじり外したとされる。プラフマナにはまとまった挿話があり、格闘において優勢になったナムチは、乾いたものによっても、湿ったものによっても、昼にも夜にも彼を攻撃しない、という契約を結んでインドラを解放する。インドラはこの条件を巧みに利用し、水の泡を用いて黎明の明かりの中でナムチの首をねじ切る。水の泡によって魔物を退治する話は、『*リグヴェーダ*』の別の話にも見られる。ヴェーダから叙事詩、プラーナにいたるまで、神々がアスウラたちや魔物に打ち克つ話には、このように、契約を巧みに守りながら、それを逆手にとる計略によって優勢な敵を倒すモチーフが多く見られる。ナムチはパーリ仏典には死神として登場する。参考: 辻『*古代インドの説話*』(春秋社1978) 69f。

マドゥ *Madhu* とカイタバ *Kaitabha*: 世界が水没し、ヴィシュヌ神が蛇のベッドに眠っているとき、プラフマー神を脅かした二人の魔物の名。目覚めたヴィシュヌに対して願いをかなえてやると言い、その命を所望されて従った。一方、ヴィシュヌも、彼らの願いをかなえることを宣言し、出された無理難題を巧みに実現しながら彼らを殺した。のちに、彼らの子ドゥン *Dhundhu* が西方の砂漠に住んで地震を起こしたり火を吐いたりして世を苦しめていたが、クヴァラーシュヴァ *Kuvalāśva* 王に殺された(『*マハーバーラタ*』III 192-195)。ヴィシュヌは「マドゥの殺戮者」「カイタバの征服者」という異名をもち、マドゥとカイタバの殺戮は後の文献にもよく説かれている。『*デーヴィー・マーハートゥミヤ*』第1章では、彼らがヴィシュヌの願いをかなえようとしたのは、この聖典で讃えられる大女神がマヤー *māyā* (幻術) という様態をとって取り計らったものという。(井上信生)

ナラシンハ(ナラスィンハ) *Narasimha*, またはヌリスィンハ *Nṛsimha*: 「人獅子」。頭部が獅子で身体が人間という姿をもつ。ヴィシュヌ神の化身(アヴァターラ)の一つ。魔王ヒラニヤカシプ *Hiranyakaśipu* を殺した。ヒラニヤカシプは神々をすら制圧し世界に覇を唱えた。一方、その息子プラフラーダ *Prahlāda* はヴィシュヌ神の熱烈な信者であった。ヒラニヤカシプは彼を激しく迫害するが、殺すことにはどうしても成功しなかった。ヒラニヤカシプが激昂して柱を打つと、その中からナラシンハが現れて彼を引き裂いた。ヒラニヤカシプは苦行の結果、プラフマー神から「家の中でも外でも」「人によっても獣によっても」「地上でも空中でも」殺されないという恩寵を得ていた。しかし、ヴィシュヌが、宮殿の門のところで、人獅子の姿をとって、その腿の上で彼を殺したのである。ヴィシュヌは詐術を発揮する神であるが、これもその一例に数えられる。出典: 『*パーガヴァタ・プラーナ*』VII 2-8など。(井上信生)

- 11 プルーラヴァスとウルヴァシーの二人の男児の中、東へ移動した *Āyu* (「活発な」) の子孫は *Kuru*, *Pañcāla*, *Kāśī*, *Videha*; 西へ移動した *Amāvasu* (「家に留まった」, 従って実際には移動しなかった) の子孫は *Gāndhāri*, *Pārśu*, *Arātṭa*

の諸部族であるとされる。因みに、*Pārsu-* は一度に20の子を生んだマヌの娘の名*pārsu-* (普通名詞としては一本の「あばら骨」)『リグヴェーダ』X 86, 23, ペルシャ族の自称*Pārsa-* (<**pār̥cya-*, 古インドアーリヤ語の*pārsvā-*に相当)「脇腹から生まれた者」を想起させる。『リグヴェーダ』IV 18, 2によれば、インドラは長い妊娠期間の後、母の脇腹*pārsvā-*から生まれた。

- 12 遠征と略奪についての記録をあげておく: 夏季の略奪行 (Taittirīya-Brāhmaṇa I 8, 4, 1), 「7つの秋の防御柵 (*pūr-*)」『リグヴェーダ』I 174, 2; 各7部隊から成る3群に別れて (『リグヴェーダ』X 75, 1), 順次3群で (Jaiminīya-Brāhmaṇa III 120)。
- 13 異部族の者たちを「ぞんざいな、はっきりしないことばを持つ者」, 「正しいことばを持たぬ者」などとよんだことについては, 上記4.の冒頭参照。
- 14 後藤敏文「Yājñavalkyaのアートマンの形容語とBuddhaの四苦」『印度学仏教学研究』44-2 (1996) 887-879, T. GOTŌ “Yājñavalkya's Characterization of the Ātman and the Four Kinds of Suffering in early Buddhism”, Electronic Journal of Vedic Studies, 12-2 (2005), pp. 70-84, 特に, 「業と輪廻」ーヴェーダから仏教へー」『印度哲学仏教学』24 (2009) 16-41参照。
- 15 今日の世界を見ると, 権限をもつ代表者の交代や貫きたい目的に合わせてルール変更がなされる可能性にも注意がいる。
- 16 「真鍮」を意味する*kāṁśya-* はシュラウタ・ストラ以降現れ, 真鍮製の容器の呼称である*kāṁśā-* (アタルヴァ・ヴェーダ以降在証) から逆にならされている。
- 17 『リグヴェーダ』で「道」を意味する語の一つに*srutī-*がある。文字通りには「流れ」を意味し, 実際にその意味での用例もある。ヴェーダ散文において, 同語は「走る」を意味する語根*sar/sṛ*によって置き換えられ, *sṛtī-*という形をとる。移動方法の変化, 道の整備などの結果であろう。
- 18 移動生活を理念上の基準とし, 周辺の定住民を利用しながら勢力圏を構成するという構造そのものは, 古くアンドロノヴォ Andronovo文化に見られるように思われる。アンドロノヴォ文化は紀元前2000~900年頃に東北ユーラシアにあったもので, 後期にはイラン系サカ族 (*Saka-*, インドではシャカ*Śaka-*, ギリシャでは*Skythai*とよばれた)の活動が含まれているように思われる。仏教における僧と教団の生活, 村落や隊商との関係, 移動を意味する*vraj*の語義など (第4節第2段落参照) などにその残影が見出されないであろうか。
- 19 cultivateの思想と野生動 (植)物の忌避の観念は, 人が飼育する牛は食しても良いが, 自然の鯨を捕食することは野蛮な行為であるとする考え, あるいは, 感覚 (「感念」というべきか?)の背景にある可能性がある。盆栽とガーデニング, 苔庭と芝刈り, 刺身とステーキ, 山菜やキノコとジビエ (鹿, 猪, 雁鴨)を巡る諸観念などについても考える余地がありそうである。
- 20 *pāśu-* (男性), *paśu-* (中性)は「犠牲獣」をも意味するため (さらに, 「動物」一般も), 祭式に用いられる穀物も列挙されていると考えられる。同語に対応するゴート語*faihu* (中性)は「財産, 貨幣」を意味した, cf. ドイツ語 *Vieh* (中性), ラテン語*pecū* (中性), *pecus* (女性)「家畜」。古代インドにおいて「貨幣」の役割を果たしたのは牛の頭数である。
- 21 『リグヴェーダ』ヴァルナ讃歌V 85, 第7詩節では, 形容詞ニツチャ*nītya-*「うちの」とアラナ*āraṇa-*「よその」とが対置されている。この両項がカエサル『ガリア戦記』中に現れるケルトの部族名ニティオブロゲス*Nitiobroges*とアッロブロゲス*Allobroges*という複合語の前肢*nitio-*と*allo-*とに対応することに疑いはない。*broges*は「境界, 国境」を意味し, 「境界線の内側にいる者たち」, 「境界線の向こう側, よその側にいる者たち」の意味である。*allo-*と*āraṇa-*とでは接尾辞の形に多少の違いがあるが, おそらく同一の語彙に根ざしていると思われ, インド・ヨーロッパ祖語の段階に遡る社会的制度上の対概念の存在が推定される。参照: 後藤敏文「サッティヤ*satyā-* (古インドアーリヤ語「実在」)とウーシア *ὄυσια* (古ギリシャ語「実体」)ーインドの辿った道と辿らなかった道とー」(『古典学の再構築』ニューズレター第9号, 2001年7月, pp. 26-40) p. 12 注40; 『リグヴェーダ』を読むーヴァスィシュタと「ヴァルナ」(京都光華女子大学『真宗文化』22, 2013, pp. 49-106) p.71f。
- 22 HOFFMANN, Aufsätze zur Indoiranistik II (1976), p. 480 n.7はvielleicht eine (ungekochte ?) Milchspeise, in die irgendwelche Getreidekörner eingeführt waren「ことによると, その中に何らかの穀粒が混ぜ込まれた (熱で調理されていない?) ミルク料理」とする。阪本 (後藤) 純子, 『印度学仏教学研究』55 (2007) 797 注22, 同, 印度学宗教学会『論集』34 (2007), p. 481 注8は「穀物の水煮」とする。
- 23 山田智輝「*vāstavyā-*, *vāstuhā-*, *vāstupā-*ー置き去りにされた居住地に関する記述を巡ってー」(印度学宗教学会『論集』32, 2005, 53-71) 59参照。
- 24 16世紀のゴート語史料が黒海北岸のクリミア半島から出ており (クリム・ゴート語), 短期間の移動略奪の後, 歴史の表舞台から消えたゴート族の村落が1000年ほどの間存続していたことが解る。ミタンニ, ヒッタイト, フランク王国の例には, 母親となった現地の女性たちの言語が, 支配層であった少数の男たちの言語をやがて吸収解消させていく経緯が理解される。ローマ帝国のラテン語化は歴史上例外的な事態と思われ, その仕組みを検証する必要がある。クリミア

半島のゴート族の例は女たちもゴート族であった可能性を示唆し、部族全体の移動を示唆する。

- 25 さらに、父権性を束ねるものとして機能する一神教については、2.2., 第3段落に触れた。
- 26 Marija GIMBUTAS, *The civilization of the goddess. The world of Old Europe*. San Francisco 1991, p. 364 他。
- 27 注6参照。
- 28 この一行がさらに含む意図についても、後藤敏文「資料 ヴェーダ文献に見られるプルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語」(『愛の神話学』篠田知和基編, 名古屋(楽瑯書院) 2011, pp. 481-525) p. 493f. 参照。
- 29 Marija GIMBUTAS, *The civilization of the goddess. The world of Old Europe*. San Francisco 1991, 362, 371, 374: Moldavia にある Suvorovo の墳墓(紀元前4400-4300 頃)と Budapest 郊外の Budakalász (紀元前3000 頃)の墓を挙げる: “A woman, presumably his widow, was apparently put to death at this time (すなわち, 族長の埋葬時) and laid to rest beside her dead lord” .
- 30 主題全体についてさらに、後藤敏文「インド・ヨーロッパ語族 -概観と人類史理解に向けての課題点検-」『ミニシンポジウム ユーラシア言語史の現在2004. 7. 3-4 報告書』上, 総合地球環境学研究所 Project 4-3FS (リーダー 木下鉄矢) 2004, pp.31-74; 2011年10月に総合地球環境学研究所(京都)で催されたシンポジウム Beyond Collapse: Transformation of human-environmental relationships, past, present and future への寄稿(編集); 「アーリヤ諸部族の侵入と南アジアの基層世界」『インダス 南インドの基層を探る』長田俊樹編集, 京都大学出版会2013, pp. 295-316を参照されたい。